平成 27 年度 福島県「大学生の力を活用した集落復興支援事業」

＜提言編＞

「里山生活文化交流村」づくりと「山舟生学」の構想

東北学院大学教養学部地域構想学科　福援ゼミ（高野ゼミ）

１．山舟生の「宝」

統計数値が示す 2000 年代以降の地方の趨勢は，少子高齢化，農業従事者の減少と高齢化，商工業の空洞化であることは，山舟生も他の農山村と同様である。しかし山舟生での体験を通して，私たちは統計では把握できない「**里山**」の環境と社会･文化的伝統に結び付いた地域づくり資源＝「**宝**」が豊富にあるとを感じた。それらは**山舟生**の**風景**となっているものである。

山舟生の土地環境の特徴は，阿武隈山地北縁の 400m 程度以下にまで浸食された**低山部**と，それを刻んで流れる**小河川**沿いの狭小な**谷底平地**，そして平地と低山部の間の**傾斜地**からなる典型的な**里山**の立地にある。そこに形成された**風景**は，人々の手で作り込まれてきた「**文化景観**」であり，景観の１つ１つには地域の生業や生活を通して利用されてきた**歴史**と人々の**意図**が刻印されている。それらを形づくってきた個人の技能や知識，そして地域共同の営みは，里山利用に生きてきた山舟生の文化そのものであり，それゆえに他からの借り物ではない地域に根差した「**本物の地域づくり**」の資源＝「宝」となり得る。私たちの印象に残った「宝」の例を以下に列挙する。

1）花：里山景観のチャーミングスポット

私たちと山舟生との出会いが「あじさい」であったが，さらにひまわり畑に遭遇し，羽山では可憐な野草の花々にも出会った。まさに「花」は人々を誘う里山のチャーミングスポットである。7月から現地入りした私たちには春の風景を見る機会はなかったが，ヒアリングで語られたソメイヨシノや山桜，菜の花，カタクリ，福寿草，「おもてなしロード」の花桃，和田山のエゴノキの花は，山舟生の魅力を向上させる。やや地味ながら特産の柿や農作物の花も含めて，「花」は里山の「宝」として生活を豊かにするアメニティーであるとともに，人を呼ぶ資源となる。

それを地域づくり資源として最大限に活用するには，地域全体を「**里山植物園**」とみたてる方法が考えられる。花々の名称や植物学的説明とあわせて地域の生業や生活との関係を記した看板を設置し，観察スポットを盛り込んだガイドブックや推奨コースを作って PR を図るとともに，理科や社会科の授業と連携した観察学習コースを作り，交流館，小学校，あじさい公園，羽山，和田山に学習交流スポットを設けることも考えられるか。

2）場所：「まとまり」・交流の結節点

花は「見る」という行為の対象にはなっても，腰を落ち着けて休息したり，人々と交流できたりする「場所」がなければ，来訪者は短時間で通り過ぎてしまうだけになる。そうした「場所」は，同時に来訪者を「おもてなし」するサービス機能が付帯したり，優れた景色を眺望したり探勝でき

たり，地域の歴史や人々の「想い」が詰まった地域のシンボルとなるような場所であると、場所の魅力はより高まる。私たちが訪れた中では，交流館，あじさい公園，羽山の各スポット，和田山，羽山神社，各集落の神社や集会所，大小川の渓流，小学校，紙漉き伝承館，ひまわり畑があった。これらの「場所」はどれも山舟生の「宝」となり得る。付帯するサービス機能を整備して，交流結節点あるいは情報拠点としての役割を高めたい。

3）行事・イベント・芸能：「つながり」の仕掛け

春の「羽山山開き」，夏の「あじさい祭り」と「ペットボタル」，そして秋の「山車祭り」は，山舟生に人を呼ぶための「仕掛け」としての役割を果たしており，地域づくりの重要な資源となっている。また，太鼓，獅子舞，萬歳、笠踊りなどの芸能はイベントの魅力を高め，地域のまとまりを保持する要素となる。これらに人を呼び鑑賞してもらうために何より大事なことは「本物性」を保持することであり，歴史ある伝統行事にはその歴史性を正しく継承すること，新しいイベントには他地域の類似イベントに対して独自の工夫を凝らすことが必要である。また地域づくりの資源として活用するには，行事やイベントが呼ぶ「人の流れ」を一過性に終わらせず，他の資源とうまくリンクさせて，より持続的な「つながり」を醸成する工夫が必要である。

4）技能・技術・無形文化：里山利用技能の資源化

里山の生業を支えてきた技能や技術もまた地域の重要な資源である。残念ながらその多くは経済的価値を失って廃れ，その技能はかつて地域を支えてきた高齢世代の方々の記憶として残っているだけである。幸いにも有志により復活した「紙漉き」は，往時の地域の伝統産業を継承するものとして大事にしたい。他にも，炭焼き，編組，木工などの山林資源の利用技術や，かつての主産業であった養蚕や繭に関連する技術について，身に覚えのある高齢世代の技能を発掘して伝える仕組みがほしい。

5）食材･料理：もてなしの文化と地産地消のシステム

私たちは山舟生訪問の度に,イベントの出店やミーティングの場で数々の食材と手料理に出会い，賞味させていただいた。そば，春菊餅，漬物，多彩な郷土料理，ワイルドなはちみつ，イノシシ肉，クマ肉，産業伝承館で味わった料理など。そこには単に「食べ物」というだけではない，里山農村ならではの手づくりの価値がある。それは都市のファストフードやコンビニフードの対極にある里山文化であり､交流とおもてなし,そして｢地産地消｣の地域づくりには欠かせない資源であり｢宝｣であるといえる。その提供の仕組みづくりと，食材知識と調理技能を支えてきた女性たちのノウハウを継承する仕組みづくりが必要である。

6）信仰文化：共同性の社会資産

他地区からも一目置かれてきた山舟生の｢まとまる力｣や求心力が何に由来するのかを考えた時，その信仰文化に注目せざるをえない。中でも「羽山」とその例大祭は，地域のまとまり力を支える社会文化的資源であり，羽山太鼓や羽山生活改善グループのよりどころでもある。また，集落ごとにも観音堂や社があり，各家の屋敷には氏神様が祀られる。それらは，花見やお祭りなどの年中行事や「講」を通して，人々の繋がりを保持する歴史的な役割を果たしてきたという意味で，紛れもなく「地域の宝」であるといえる。

信仰の「内面」に関する部分まで地域づくり資源とすることはできないしその必要もないといえるが，外形的な部分は，伝統的な里山の風景や文化を象徴する交流拠点としての「場所づくり」に役立てることはできるのではないか。

7）人・組織：アイディアと行動を生むマンパワーの活用と継承

以上の各資源は「自然」に生まれものではない。羽山の野草も，重い礎石を運び上げて登山コースを整備し，花々を解説してくれる人がいて，外来者がふれあえる「資源」となった。また行事やイベントも，運営する人々の「まとまる力」があって実現できる。食文化もまたその担い手となる女性たちの技能があってこそ受け継がれる。さらには，他地区に先駆けて実現した「自治振興会」も「むらづくり推進協議会」以来の山舟生の人と組織力の伝統を土台としている。その意味で，山舟生の地域資源は，山舟生の人々が日々の生活の中で育み醸成し「開発」してきたものといえる。その**知識，技能**，そして**アイディア**や**夢**を個人や仲間内の範囲にとどめず，「**地域の宝**」として地域づくりに生かしたい。里山に生きてきた人々にこそ，都市では得られない知識がある。

いま担い手の多くが「高齢者」の世代となりつつあり，個人や地元の技能やノウハウ，アイディアの多くは，何もしなければ継承されずに消えてしまう。それは「山舟生」の地域文化自体の消滅にもつながるのではないか。個性なき「伊達郡の山村」や「福島の通勤圏」になってしまう。

2.「宝」の活用構想：「里山生活文化交流村」をめざした「山舟生学」の創始

これらの「宝」を一覧表にしてみたのが表１である。私たちの山舟生での一連の体験はまさにこれらの「宝」に次々に出会う体験であった。　限られた時間の中では，その出会いの大半は一瞬だけで上辺だけのものにならざるを得なかったけれども，それゆえに印象深くもあった。それはまた，日本の伝統的な村，阿武隈山地ないしは伊達郡の伝統的な「里山の村」そのものを体感する，一つの「学習体験ツアー」だったといえる。

表１　地域づくり資源「宝」のまとめ

		資　源
1	花	桜,カタクリ,福寿草,エゴノキ,あじさい,ひまわり,野草
2	場所	交流館,あじさい公園,羽山の各スポット,和田山,羽山神社,各集落の神社や集会所,大小川の渓流,小学校,紙漉き伝承館,ひまわり畑
3	行事・芸能	花見,山開き,あじさい祭り,ペットボタル,山車祭り,羽山太鼓,獅子舞,笠踊り,萬歳
4	信仰	羽山信仰,鎮守神,産土神,氏神,講
5	技能・技術	紙漉き,炭焼き,繭,編組,木工,あんぽ製造,山菜採り,狩猟,釣り,山林資源の利用技術
6	食	そば,春菊餅,羽山漬,あんぽ料理,多彩な家庭料理,ジビエ料理
7	人・組織	地元の資源,技能,文化を担う人々,アイディアマン,自治振興会,町内会,行事グループ,リーダー

地域空間をまるごと「博物館」とみて，体験学習や交流の場として，子供たちや来訪者とのであいを通して自地域の良さを再発見し，活性化にもつなげようという動きは，日本では 1990 年頃から称揚された「グリーツーリズム」や「アグリツーリズム」，1995 年頃に日本に紹介された「エコミュージアム」(生活・環境博物館）が契機となり，地域づくりの手法として導入された。この理念に沿って 1998 年 12 月に農林水産省が創設した「田園空間博物館」整備事業には，東北では福島県を除く 5 県の 8 箇所が指定されている（右図）。そして 2002（平 14）年度から学校教育に導入された「総合的な学習の時間」をエポックとして地域の人々が子供たちの社会学習・体験学習にかかわるようになった。さらに 2008 年に日本でも委員会が創設されて認定地域が増加中の「ジオパーク」がある。また「美術館」と見立てる取り組み

http://www.maff.go.jp/j/nousin/sousei/den-haku/d_tohoku/index.html

では，山村や離島をまるごと展示場とする野外アートイベント（越後妻有など）がある。

もちろん，大規模な交流圏を前提とする取り組みをイメージしてしまうと，小学校区 1 つの旧村規模の山村にはできそうもないもののように思われる。しかし全国には，旧村どころか，集落の集会所を体験学習の場として小学生を受け入れて，活動体験と食事を提供して活性化している過疎山村の例もある。水俣市の「村まるごと生活博物館」がその好例である。2015 年 12 月，政府は東北観光復興対策交付金を創設するなど，東北地方への外国人観光客誘致の支援に乗り出した。「里山文化」の体験は日本の農村文化に関心をもつ外国人にも，魅力的にとらえられるのではないか。

ところで，この水俣市の取り組みに忘れてならないのは，それが集落の人々による自地域の文化や資源，「宝」についての学び，すなわち「地元学」の取り組みがあったことだ。幸いにも山舟生では既に「モデル地区事業」の取り組みにより課題が洗い出されて「地元学」と同様の活動が既に始まっている。さらには「あじさい祭り」や「ペットボタル」を生み出したように「むらづくり協議会」の時代からこうした地域資源についての学習活動は盛んであった。「花桃ロード」や「お手玉」を考え出すような「学習」の機運は以前から続けられているのである。

その集大成の方向性として，「里山生活文化」を体験し，伝承し，交流する拠点地区となることを目標に掲げること。すなわち，ひとまずは日帰り行楽圏から人を呼べる地域づくりとして「日本の伝統的な里山文化の村」という自己認識に立ち，田園空間博物館，生活文化博物館（Living Museum）といった視線で，上記のような地域の資源とアイディアを「宝」として見直し再整理する取り組みは，自治振興会の各部での研究テーマ，あるいはサロンでの学習テーマとして継続して行われてよい。「学習」が堅すぎる場合は「楽習」のほうがよいかもしれない。

そうした取り組みは，すなわち以下のような地域のイメージに集約される：

> ★「里山生活文化交流村」づくりめざした「山舟生学」の創始
>
> みんなで楽しく学び続ける「**楽習の村**」づくり ― 「地元学」の精神

そういう視点から，私たちが山舟生での実地観察とヒアリングを通して感じた地域づくり課題のうち，印象に強く残ったものをあげておきたい。

1）既存資源の継承・発展

a）交流拠点の整備 … 交流館とあじさい公園の機能・設備拡張，羽山と和田山の休憩場所整備，「花」スポットの整備

b）食文化の学習・継承 … 食生活改善部会による勉強会や「料理コンテスト」の継続

c）紙漉き技能の次世代への継承，製品開発。近隣和紙（白石,上川崎,安達）との連携。

2）新たな文化イベントの創造

a）**お手玉** …「お手玉グループ」の取り組みを拡大・発展。エゴノキ林の存在，里山文化のイメージに合致，子供を巻きこめる。お手玉の技を習得，「日本のお手玉の会」（本部・愛媛県新居浜，44 支部，東北地方 0）にエントリー。

b）**和紙・里山アート** … 近隣和紙と連携して製品・アート作品の展示会（屋内外）。大学･高校の美術サークルや美術団体に野外アートの発表の場を提供。 … プロデュース人材が必要。

3）地域文化の見直しと掘り起こし … 「山舟生学」の創始

a）消えゆく民俗行事，信仰行事，生活史の記録 … 地域文化資源の可能性

b）山林利用技能の調査・継承 … 技能保持者調べ，山林利用の技能と知識の調査，道具類の保存 … 市史編纂室や大学の民俗学教室との連携

4）情報発信

a）自治振興会のサイト拡充，情報発信の体制づくり … 伊達市の支援

b）外国語（まず英語）による情報発信

5）広域連携

a）里山の村同士でネットワークづくり … 阿武隈，伊達市，福島県，南東北，東北，全国

b）県境の打破 … 仙台圏への PR，丸森（耕野,大張,筆甫,大内 etc）と連携

実は，これらの多くは「地域自治モデル地区事業」で整理されたアイディアのリストにも含まれている（表２）。

表２　地域づくりの課題とアイディア（予備調査編,表 21 を再掲）

			対策アイディア
自然と共に生きる地域	イノシシ対策	5	対策方法，生態調査，電気策，オリ貸与など
	自然を楽しむ	3	公園整備，花木の調査，見ごろ情報など
	草刈，林道管理	3	必要箇所の調査，管理方法の調査，行政と相談
	羽山の利用	4	天文台，キャンプ場，花マップ，情報発信
	天文台	3	観測愛好会を結成
	和田山公園	2	維持管理の方法検討
	鉱泉	2	専門家に調査依頼，地権者の意向調査
文化を守り育てる地域	羽山例大祭	5	太鼓の練習会の定期開催，小学校で太鼓授業，太鼓の名簿づくり，太鼓保存会の設立，山車巡行方法の検討，新出し物検討，花受けの検討
	郷土芸能	5	芸能の洗い出し，地域ぐるみの組織化，人材育成，地区外にも募集，披露の場を開拓
	神社仏閣，七不思議	5	紹介冊子づくり，六地蔵の発掘，風穴への道整備，保存会の結成
	あじさい祭り	5	山舟生全体の取り組みに，ペットボタルに工夫凝らす，交通整理，トイレ整備
	若者参加の仕組み	5	若い人だけの話し合い
	和紙	5	保存会がなくなった理由を調べて改善
	イベント	3	心から楽しめるように
	地図･看板の更新	3	
人と人をつなげる地域	情報発信	5	出身者名簿づくり，ネット利用，mail, LINE利用，マスコミにPR，イベント時にPRチラシ
	見守り，空き家	5	防災スピーカー，地域広報誌，掲示板の活用，元気旗の設置
	若い人の場	5	青年会の復活，若い人の場づくり，イベント実行委員を依頼，体験型イベントにする
	サロン	5	参加しやすいサロン名称，拝み講で世代交流，合同サロン
	交流館の活用	4	
	交代制居酒屋	2	

			対策アイディア
暮らしやすい地域	除雪	5	協力実施体制，費用負担，優先順位，市との分担
	香典	5	香典返し，快気祝いの見直し
	小学校	5	統廃合の話し合い，体験学習充実，保護者と住民とのかかわり方
	健康	5	遊歩道づくり，健幸都市づくり，健康教室，移動診療所，検診皆受診
	上下水道	5	上水道敷設，公衆トイレ，合併浄化槽
	安全	5	外灯設置，ダンプ対策，砕石場と話し合い
	買い物	5	地域の店，買い物代行，JA宅配，JA支店の土日開業
	交通手段	5	山舟生専用デマンドタクシー
	イベント	3	イベントの反省
活気とやりがいがある地域	便利屋	5	人材バンク，サービス種類，料金，配食
	農業	3	観光農園，里芋オーナー制，農業共同化
	資源開発		鈴虫，魚養殖，サルナシ，花苗，葛，甘藷
	特産品	3	わら，竹，つる等の民芸品，和紙の活用
	食資源	3	伝統保存食，春菊餅，羽山漬の販路拡大，そば，山舟生ブランドづくり
	直売所	3	場所，収支，複合機能の検討
	経済効果	3	イベントにあわせた集約･経済効果を検討
	観光開発	3	健康，マイナスイオン，ホタル川，羽山開発，案内板，生物･歴史の調査
	自然エネルギー	4	小水力，風力，太陽光，外灯に利用，他の自然エネ

上記のテーマには「優先度」が 5 段階で格付けされているのもすばらしい。このこととの関連でいえば，「**地域づくり**」には次のような社会的つながり醸成から経済効果の実現に至るまでの段階が含意されている：

①安全で暮らしやすい環境を整える
②人々の「まとまり」と「つながり」を醸成する
③外部へのアピールを通して地域の誇りを強化する
④外部から交流人口と経済効果を呼び込む
⑤地域の産業を発展させて後継者世代に継承する

「地域づくり」の目標はこれらのいずれかの側面に多かれ少なかれ関連する。これらの段階は必ずしも「順序」や優先度を意味するものではなく、地域にとって必要なことと「楽しい」と感じることから同時並行的に進められるのがよい。

私たちが山舟生で感じたことは，この「モデル地区事業」における取り組みは地域の「宝」の再確認のために価値あるものであること，そして人々のアイディアとパワーを結集してできるところから発展させてほしいということに尽きる。それはそのまま「山舟生学」の実践であり，地域を楽しく学ぶ「楽習の村」の実現につながる。

３．エゴノキと「お手玉」の可能性

地域の「宝」のうちで学生たちの注目を集めたものの中に，和田山のエゴノキとその実を利用した「お手玉」づくりがある。7･8 区町内会ヒアリングで元自治会長の幕田忠一さんと奥様より，和田山の奥に部落の人が手入れをしているエゴノキがあり，花がきれいで，実には毒があってヤマガラ以外の鳥は食べず，種は虫がつかず心地よい音がするので「お手玉」の材料に最適であること，会津木綿とコラボしてお手玉づくりを始めていること，なんとか地域づくりに役立てられないかと考えていることを教えていただいた。新聞でも取り上げられたということで，さっそくその記事を入手した（右掲）。それによれば，既に 600 個のお手玉を作ったこと，エゴの実には分けてほしいとの希望が寄せられていること，さらに「お手玉の森」による地域づくりを思案中であることが記されている。

日本経済新聞　2014. 2.17

街かど人物館

エゴノキでお手玉

種まきから10年 実を結ぶ

「お手玉にこれほど手間がかかるとは」。かつて地元に多かったエゴノキの実を使うお手玉を復活させた福島県伊達市の農業、幕田忠一さん（63）は笑う。

エゴノキの実のお手玉は音が心地よく、虫がつかないため愛された。幼い頃の遊び道具をつくろうと、この木の種をまいたのは10年ほど前。なかなか発芽せず苦労したが18本が育ち、昨年秋、実の収穫にこぎ着けた。ピーナツより小さい実約30キロを天日で干し、一つ一つ皮をむくのに2週間以上。袋も「よい音が出るよう何十回も作り直した」。

妻や自治会などの仲間の力も借りて約600個を作り、高齢者のサロンや小学校に寄贈して喜ばれた。お手玉の愛好家からは「エゴの実を分けて」という申し出も約20件寄せられた。

エゴノキはもともと、蚕糸業の衰退で桑畑が耕作放棄地になるのを防ぐために植えられた。今は「お手玉の森」として地域おこしに使えないか思案中。「日の当たらない存在だったエゴノキからお手玉が生まれ、昔遊びの復活につながった。エゴノキも喜んでいるだろう」と感慨深げだ。

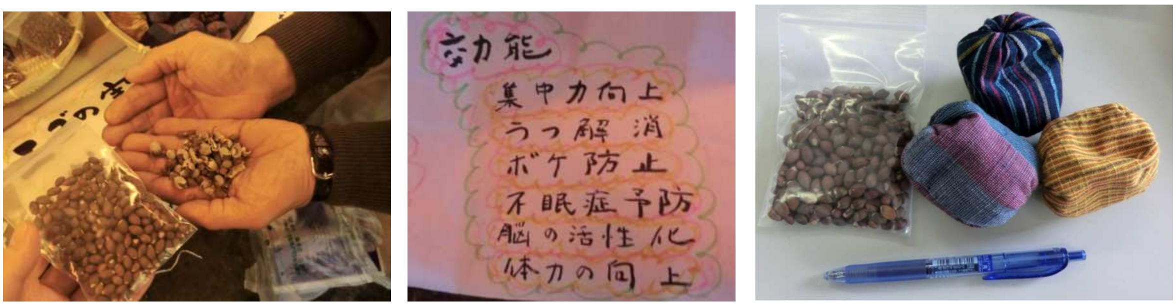
「エゴノキ」で web 検索すると，特徴的な樹形，花，実の画像（下写真）とともに，実から石鹸液を作る方法を解説するページがいくつもあることが分かり，「エゴノキ，花見」の検索では，屋久島と祖父江町（木曽川下流）くらいで，地域をあげて資源化･名所化している例は少ない。

エゴノキの樹木，花，実（樹木図鑑 web（http://www.geocities.jp/greensv88/jumoku-zz-egonoki.htm））

他方「お手玉」による検索では「日本お手玉友の会」のページ（http://www.otedama.jp/）があって「お手玉遊び」競技のルールが定められ，全国に 44 の支部があることが分かる。支部の分布は近畿以西が 33 で関東以北は 7，うち東北は 0 である。

また「お手玉」は民俗文化であって健康の向上にもつながることから，関連研究があるのではないかと考えて，学術論文検索サイト（CiNii）で検索したところ 42 タイトルが検索され，タイトル内容と掲載雑誌から類推できる分野構成は，民俗文化 10，幼児教育 12，リハビリ 10，先端技術 10 でと，数は多くないが幅広い分野にわたっていた。

11 月 7 日の山車祭りの夜店でお手玉グループの店を見かけたのでさっそく買い求め（下写真），研究室の一隅を飾っている。



11 月 7 日の山車祭りの出店でみかけたエゴの実，お手玉の効能，買い求めたお手玉

こうしてみてくると，「お手玉」は日本の伝統の遊び文化であり，お手玉遊びで歌われる歌もまた文化資源である。加えて幼児の運動能力向上，高齢者の体力や注意力の維持に役立つという現代的意義もある。さらには「日本お手玉の会」の東北最初の支部にもなり得る。そしていうまでもなく，お手玉の良質の材料となるエゴノキは地元の里山資源であり生活文化でもある。さらには「遊び」だけでなく「制作」も含めた「楽習」の対象にもなり，男女・世代を限ることなく，みんながかかわれる可能性がある。「会津木綿」という県内ブランド品との連携も既に実践されている。とすると地元の和紙や藺細工との連携の可能性もあるだろう。

以上から，お手玉とエゴノキは，羽山山車祭り，あじさい，あんぽ柿と並ぶ山舟生のシンボル資源として生かすにふさわしい可能性を持つといえるのではないだろうか。